

◇===== [ 第83号 ] =====◇  
唯契の窓 唯物論的社会契約論研究所月報 2025年6月15日

◇=====◇

6月3日に田植えが終わりました。農家としてはようやく心地ついたところ  
です。発行日の変更にご理解いただき、ありがとうございました。

さて今月は日本学術会議をめぐる法改正について触れようと思っていたので  
すが、13日にイスラエルがイランを攻撃するという事態が発生し、急遽この  
問題について論評することにします。事態が早急に鎮静化することを願います。

☆===== [ 時事解説 ] =====☆

6月13日、イスラエルはイラン国内の核関連施設を含んだ複数の施設をミ  
サイル攻撃しました。これに対してイランは報復攻撃を行い、「両国は事実上の  
交戦状態に突入した」と報じられ<sup>1</sup>、事態は緊迫化しています。

イスラエルは何故イランを攻撃したのか。ロイター共同の報じる<sup>2</sup>ところによ  
れば、イスラエル側の主張は次の通りです。

「イスラエルは13日未明、イランの核関連施設や弾道ミサイル工場、軍司  
令官を標的とした大規模な先制攻撃に踏み切った。イランの核兵器開発を阻止  
するために長期作戦を開始するとし、中東の緊張が高まっている。」

このことについて、A B E M A T I M E Sは武隈喜一氏の話として次のよう  
に解説しています。

「アメリカはイランとの間で核の交渉を進めてきたがうまくいかない。それ  
で、それに業を煮やしたネタニヤフ側が『もうこれはイランを攻撃するしか  
ない』と決断に踏み切ったのだと思う。イスラエルは今の状況に大変危機感を持  
っていたから、これ以上進めればイランは確実に核を持つという恐怖心がネタ  
ニヤフ首相に実際の攻撃に踏み切らせたのだと思う」<sup>3</sup>

これはネタニヤフ政権の口実をそのまま翻訳したようなものですが、ここ  
からはイスラエル側、というよりネタニヤフの主張の欺瞞性を十分に読み取る  
ことができるでしょう。

実際、今現在イランが核戦力を有しているという事実はありません。現実  
には、歩みは遅いとはいえアメリカとイランは核問題について交渉を重ねており、  
イランが日本と同じように核戦力を保有せず、原子力の平和利用のみを進める  
という可能性もなかったわけではありません。自分たちが脅威を感じるからと  
言って、他国を武力攻撃することが容認されるなら、自衛とは侵略行為と同義  
であるといっているようなもので、とても許容されるような主張ではないでし

---

<sup>1</sup> 読売新聞オンライン 6月14日付

<https://news.yahoo.co.jp/articles/93798f3b543ecad04c1ca051f2f0683418c69b2f?page=1>

<sup>2</sup>

<https://jp.reuters.com/world/security/YWIBFPBUZNORLPLEKNEUYIZBQ-2025-06-13/>

<sup>3</sup> <https://news.yahoo.co.jp/articles/b4773998e1657244356f78410450497eb5538ca5>

よう。

したがって、ネタニヤフの本当の目的はイランの軍事的脅威の排除を口実にした何事かである、ということになります。

その点について同氏は次のように述べています。

「実はネタニヤフ政権とトランプ政権は今微妙な立場だった。つまり、ガザの和平も進まないことにトランプ政権は大変苛立ちを募らせていて、そのことでネタニヤフ政権が国内で非常に弱い立場に追い込まれていた。そして、それを克服するためにも、ネタニヤフ首相はイランの核施設への攻撃を自分の政権浮揚に使っている。そして、それによってアメリカとの関係をもう一度引き戻そうということも考えていると思う」<sup>4</sup>

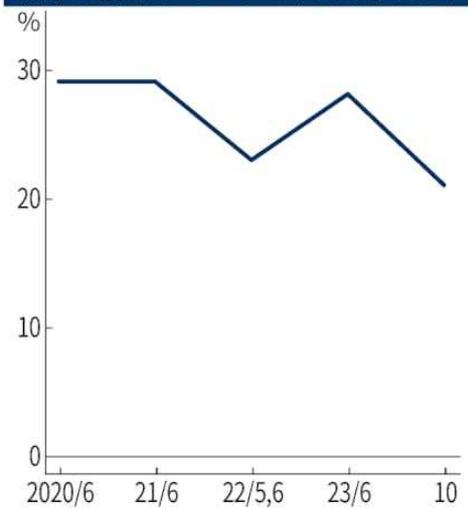
つまり、ネタニヤフ首相が今回のイラン攻撃に踏み切った理由は、自身の政権支持率を引き上げるためだったというわけです。

恐ろしいことですが、今回のイラン攻撃にとどまらず、現在地球上でもっとも悲惨な状況に陥っているガザへの軍事行動も、ネタニヤフ首相の支持率維持のための手段でした。この経過を見てみます。

2016年の終わりごろに、ネタニヤフ首相の汚職疑惑が明るみに出ました。年明けの1月2日にはイスラエル警察が「複数の実業家から贈り物を受け取った疑惑を」調査するために、事情聴取を行っています<sup>5</sup>。(この疑惑については公益財団法人中東調査会の『中東かわら版』No157「イスラエル:ネタニヤフ首相に対する汚職疑惑」<sup>6</sup>に詳しく報じられています。)

こうした疑惑を背景に、ネタニヤフ政権に対するイスラエル国内の支持率は低下傾向にありました<sup>7</sup>。その後2020年6月には30%近くあった支持率は2023年10月には20%台前半にまで低下していました。これには2023年10月のハマスによるイスラエル奇襲を許したことに対する批判もあってのことでした。しかし当時のネタニヤフ政権は連立を組む極右政党な

政府を信頼するユダヤ人市民の比率



(出所)イスラエル民主主義研究所

<sup>4</sup> (同上)

<sup>5</sup> AFP 通信。2017年1月3日付。 <https://www.afpbb.com/articles/-/3112968>

<sup>6</sup> [https://www.meij.or.jp/kawara/2016\\_157.html](https://www.meij.or.jp/kawara/2016_157.html)

<sup>7</sup> 支持率については日本経済新聞 Web 版記事「イスラエル首相支持急落 急襲に責任論、人質救出が課題」による。

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGR30CD00Q3A031C2000000/>

どの意向もあって対ハマス強硬姿勢をとり続けます<sup>8</sup>。この強硬姿勢が、ハマス幹部の殺害などの成果を上げ始めると、次第に支持率は回復に向かい始めました<sup>9</sup>。この経験からネタニヤフ首相はガザ地区への攻撃を強化していきます。まさに自己保身のための戦争遂行に邁進していくようになったわけです。

このことを危惧していたヨシ・メケルバーグは次のように危機感を表明していました。

「ネタニヤフ氏は、自分が職を永久に追われることになることを知っているため、誰にも長期間にわたって自分の職務を代行させることはしないだろう。そのため、ネタニヤフ首相が職務遂行不能であると最高裁に宣言するよう、司法長官に要請するのだ。このような動きの主な理由は、ネタニヤフ首相が裁判を受け続けながら政権にとどまり、司法の裁きから逃れる最善の策は、イスラエルが戦っている戦線の少なくとも1つをエスカレートさせ、より深刻な緊急事態を引き起こすことであると考えられる可能性がより高いという、より大きな危険が迫っていることだ。」<sup>10</sup>

しかしその後のガザ地区の惨状は、イスラエルに対する世界からの批判を招き、イスラエルの擁護者アメリカからも苦言を呈されるようになります。さらに戦死者や傷病兵の増加、戦線の拡大などにより徴兵制が強化されるなどした結果、イスラエル国内でもネタニヤフ政権に対する批判が再び高まってきました。イスラエル国内の世論は「イスラエル世論、人質解放へ攻撃継続を56%支持 首相続投は15%」<sup>11</sup>という状況になってきたのです。

ネタニヤフ政権が新たな紛争を求めたのは、政権の延命工作のためには必然的な選択だったということです。この流れの中で引き起こされたのが今回のイラン攻撃なのです。

先に紹介したヨシ・メルケバーグは、

ネタニヤフ首相の警察での事情聴取の映像がリークされたことを基に制作されたドキュメンタリー映画『The Bibi Files』のプロデューサーであるアレックス・ギブニー氏は、「私はこの男ほど道徳的に腐敗した人物をこれまでに見たことがない」と述べた。

と、記事中で紹介しています。自らの保身と引き換えに、何万という人の命を

---

<sup>8</sup> 産経新聞 Web 版 2024 年 9 月 3 日付

<https://www.sankei.com/article/20240903-BQMMFZLMAJL3NPQXELLZQDLA74/>

<sup>9</sup> ロイター「ネタニヤフ氏政党への支持が回復、イスラエル世論調査」2024 年 9 月 16 日付

<https://jp.reuters.com/world/security/IM2U30TKLJOKTBPEPSWZDKGO6E-2024-09-16/>

<sup>10</sup> ARAB NEWS 「汚職裁判が迫る中、ネタニヤフ氏はさらに危険に」 2024 年 11 月 24 日付 [https://www.arabnews.jp/article/opinion/article\\_134605/](https://www.arabnews.jp/article/opinion/article_134605/)

<sup>11</sup> ロイター 2024 年 1 月 3 日付

<https://jp.reuters.com/world/mideast/ZESNBH74QZMPXNL7R3T5OU2T3I-2024-01-03/>

奪うことすら厭わない、このような人物が戦争犯罪人として訴追された<sup>12</sup>ことはあまりにも当然というべきでしょう。

さて、ネタニヤフ首相のこうした政策、つまり自己の保身や支持率の強化のために仮想敵を設定して戦争の危機を喧伝する政策は「戦争政策」と呼ばれます。戦争政策が失敗すると実際に戦争に突入してしまうわけですが、同じように戦争政策のコントロールに失敗して戦争に突入してしまった人物としてはロシアのプーチン大統領がいます。

しかし今のところ「戦争政策」のコントロールに成功している為政者も少なくありません。日本の自民党・公明党連立政権もその一例です。

私たちがネタニヤフ首相の事例から学ぶべきは、次の点だと思います。

1. 自衛のための軍備とは侵略のための軍備と同義であること
2. 他国からの侵略を受けないためには、他国が軍事的脅威を口実とできないよう、非武装でいることが最も効果的であること
3. 他国の軍事的脅威を声高に喧伝する政治家には、必ず裏があることを知っておくこと

一日も早く、中東に平和が訪れること、そしてウクライナが平和裏に自国の領土と安全を取り戻すことを、心から願っています。

☆＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝☆

●＝＝＝＝[ 再論 唯物論的社会契約論 下書き ]＝＝＝＝＝●

唯物論的社会契約論に至る思考過程について。

今回は唯物論的社会契約論の内容そのものではなく、この理論の発見に至る思考過程について少し述べておきたいと思います。

この思考過程には三種類の問題意識がありました。

一つ目は、歴史学徒としての「歴史認識」に関する問題意識。

二つ目は、民主的医療機関の職員としての「基本的人権」についての問題意識。

三つ目は、社会変革政党の党员としての「革命」についての問題意識です。

順次述べていきますが、本日は歴史学徒としての「歴史認識」に関する問題意識について述べます。

筆者の学生自体の専攻は西アジア古代史のはずでした。いまでもハーカマニ

---

<sup>12</sup> 国際刑事裁判所（ICC）は11月21日、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相とヨアフ・ギャラント前国防相に対し、人道に対する罪と戦争犯罪の容疑で逮捕状を発行  
JETRO 2024年11月25日付  
<https://www.jetro.go.jp/biznews/2024/11/88a6a46c0ff5ad7d.html>

シュ朝ペルシア（ギリシア語読みですとアケメネス朝ペルシャ）にかんする興味は継続しております。ただ卒論は指導教官の都合もあって「近代ドイツ史」で南西ドイツの統一運動について研究しました。まあ、ろくなものは書けませんでした。それはさておき。

史学を学ぶ学生は必ず「史学概論」という単位を受講することになっています。要するに「歴史学とは何か」ということを最初に学ぶわけです。歴史学というのは、一般に思われているような歴史のこまごまとした新事実を明らかにすることを目的とした学問ではありません。それは歴史学的前提であって、歴史学はそこから先に進んで、そうした史実を基に、歴史を解釈することに本来の目的があります。

そこで言われるのは「歴史は現在から書かれる」ということ。これをざっくり説明すると、「現在」というのは「今歴史が作られている現場」のことを言います。つまり今の社会の抱える問題・矛盾などを解決しようと社会と格闘する立場から、過去の歴史を解釈するという営み、これが歴史学なのです。

問題なのはこの「立場」というもの。この立場というものは端的に言って今の社会の仕組みを維持しようとする立場と、社会を変革しようとする立場があって、そのどちらの立場に立つのかによって歴史の解釈が変わってしまうという問題が生じるのです。

具体的な事例に即して言えば、福沢諭吉の評価をめぐっては、資本主義を維持しようとする立場から見れば、民族の自立を促し日本の市民社会を確立するために尽力した偉人ということになりますが、資本主義をやめて新しい経済システムを作ろうとする立場からすれば、日本に資本主義を導入し、かつての大名など封建領主の資本家への転身と、それ以外の人々を無産者として労働者階級にまとめ上げ、格差社会の仕組みを定着された悪人であるという評価になります。この評価はどちらが正しいのかというと、それぞれの立場からの解釈なのでどちらが正しいのかという結論は出せないということになってしまいます。

はて、それでいいのだろうか？ これが歴史学徒としての問題意識でした。

なぜ人類に共通する評価基準がないのだろうか。すべての人々が共有できる判断基準というものは存在しないのだろうか。

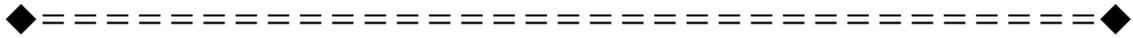
そこで、改めて人類の歴史を振り返ってみると、生物としての人類史というものができてきたわけです。そう、歴史認識の基準は思想ではなく科学であるべきだ。ヒトの歩み、生物としての歩み、これこそが人類の歴史を評価するべき絶対的な基準であるべきだ。

この発見が唯物論的社会契約論の最初の「導きの糸」となったものでした。

●=====●

◆=====◆

紙面の関係で休載します。



【活動報告】

三田市民病院統廃合反対のビラを配布しました。  
7月は都合でお休みいたします。次回は8月1日発行の予定です。

【お詫びと訂正】

5月1日号の冒頭で「山嗤う」と記載しましたが、「山蕨う」の誤りでした。  
なお通常、季語などとしては「山笑う」と表現されるようです。